

Eureka IX

六年制通信 No.35 令和4年2月18日(金)号

花弄

これで「かろう」と読みます。禅語ですね。「弄花香満衣」(ろうかこうまんい) から来ていて、「花弄」はお茶室のお軸などに見られるようです。久須本文雄の『禅語入門』によると「掬水月在手 弄花香満衣」というのだそうで、読みは「水を掬すれば月手に在り、花を弄すれば香衣に満つ」です。掬するは「きくする」、両手ですくうという意味で、水を両手ですくうと月は手の中に在る、花を弄する「ろうする＝もてあそぶ」と香りが衣に満ちるという意味。花を手にして時間がたてばその香りが服に染み込むということです。この「弄花香満衣」の、禅語としての難しい解釈は私にはわかりません。しかし、私なりにこれを二通りに考えてみました。

花の香りが衣にしみる、すなわち私たちは環境に左右されるという比喩だ、そう考えられます。花の香、それは君の先生かもしれない、友だちかもしれない、学校のことかもしれない、ひょっとして家のことかな、家族のことだろうか、つまりは君を取り巻く環境が君に染みわたっていくわけで、考えると怖いですね。先生や友だちは慎重に選ばないと、長いこと一緒にいるとその人の香りが移る、つまり必ず影響を受けるということです。ですから、皆さん、学ぶ環境に気を配りましょう、こんな解釈が一つ。

そしてもう一つ。これは、今週のおすすめ本を読んだからかもしれませんが、ずっと触れ続けていると、その花の香りは「知らぬ間に」自分のものになる、という解釈です。桜の木の下でお茶をたて、お客様にサービスをしている、長い時間懸命にそうしているうちに、ふと自分の着物に桜の花の香りが移っていることに気づく。そういう情景を描いてみます。これ、実は学生の頃何度も先生に教えられたことなのです。私は語学の勉強しか知りませんが何でも同じだと思います。先生の出された比喩は桜の下の茶会ではありませんでしたが「実力というものは、すぐに身につくものではないよ」と何度言われたかわかりません。「知らぬ間についているものだ」と。この「知らぬ間についているもの」が大切で、結果を焦って求めない、求めてはならないということです。先生に教えられるまま、よくわからないまま、しかもわからないことがどんどん増えてくるのに耐え、努力を止めないでいると「気がつけば」できるようになっている。「知らぬ間に」実力がついていく。そして、そうして身についた実力は本物だということです。よくわからないままの状態は辛く、その間、あえて言えば無駄なこともたくさんしている(と考えてしまう)のですが、長い時間をかけて実力をつければ、若い時に無駄だったと思ったことすら、自分にとって必要なことだと実感できる。私は「弄花香満衣」の解釈はこちらの方が好きですね。皆さんも自分だけの解釈をしてごらん。

さて、今日は映画と本をおすすめして終わります。『道』と『わたしが・棄てた・女』です。「今週のおすすめ」でも触れましたが、フェデリコ・フェリーニの『道』はアンソニー・クイン演じる旅芸人ザンパノとジュリエッタ・マシーナ演じる哀れなジェルソミーナの物語です。ジェルソミーナは純真無垢、あまり物事をしっかり考えることができない。ザンパノは傍若無人で暴力的。そんな男にわずかの金で買われて働かされるジェルソミーナはやがて道端に捨てられる。一人になったザンパノは数年後、ふとジェルソミーナがよく口ずさんでいたメロディーを耳にする。洗濯物を干していた若い女が歌っていたのだ。その歌を歌っていた女はどうしたと問うザンパノ。もう死んでしまったわと答える女。そして有名なラストシーンへ。私、何回観たかなあ。

この映画のことを考えると私は遠藤周作の『わたしが・棄てた・女』をどうしても思い出してしまいます。吉岡という男に遊ばれて捨てられる森田ミツ。しかし最後まで彼女は吉岡を恨まない。そしていつか吉岡から連絡が来ると信じながら不治の病に苦しむ人々の世話をして暮らしている。ところがやがて同じ病気に感染して死んでしまう。最後に「吉岡さん…」という言葉を残して。私、何回読んだかなあ。

詳しいことは紙面の都合で書ききれませんが、この二つの作品には「神のはたらき」が描かれていると私は思っています。ジェルソミーナの死を知ったのちのザンパノとミツの死後の吉岡。二人の人生を私たちは想像してしまいます。君たちもこれらの作品に触れてほしいと思います。一度ではわからないと思いますから何度でもね。

今週のおすすめ

・森下典子 『日日是好日 「お茶」が教えてくれた15のしあわせ』（新潮文庫）
「まえがき」にこうあります。

世の中には、「すぐわかるもの」と、「すぐにはわからないもの」の二種類がある。すぐわかるものは、一度通り過ぎればそれでいい。けれど、すぐにはわからないものは、フェリーニの『道』のように、何度か行ったり来たりするうちに、後になって少しずつじわじわとわかりだし、「別もの」に変わっていく。そして、わかるたびに、
自分が見ていたのは、全体の中のほんの断片であったことに気づく。

私はこの本を読んで、誰が言ったか「神は細部に宿る」という言葉を何度も思い出しました。お茶の所作は非常に細かく決められ、しかも季節によって変わる。筆者はどうしてそうしなければいけないのか質問をする。先生は「理屈なんかどうでもいいの。それがお茶なの」と答える。しかし何年も何十年も続けているうちに、筆者は茶事全般には一切の無駄がなく、それぞれに心のこもった「おもてなし」があることに自分で気づいていく。この本は体験がなければ絶対に書けないですね。大変いい本です。

ちなみに「まえがき」のフェリーニの『道』というのは、映画です。若いころに観てもどこが名作なのかわからない、筆者がそういう例として出していたのです。私もこの映画は名作中の名作だと思っています。君たちもいつか観てみるといい。

BGMは映画『道』よりジェルソミーナのテーマでした…。